

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投承認雜誌) 第三二五号
昭和四十八年七月二十五日印刷 昭 十八年八月一日発行

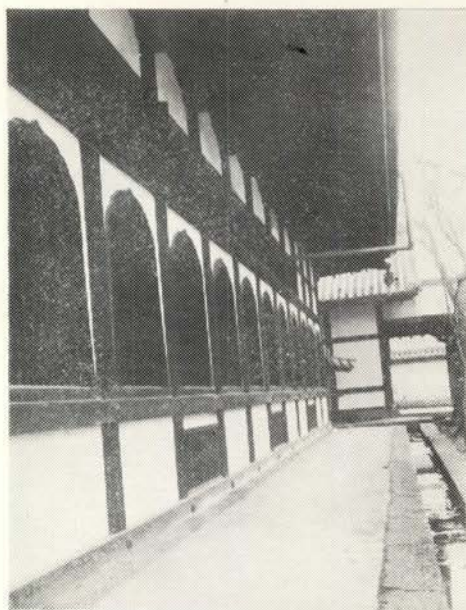


第三十九卷

第八号

1973

8



八 月 号

——目 次—— 表紙『朝顔・牽牛花』松涛達文画

最高光明のお方……………	須 藤 隆 仙…………	(2)
若い人達よ、モテル人になろう……………	北 山 良 祐…………	(4)
御法語と私 法語に導かれて……………	遠 田 弘 俊…………	(8)
選択集講話⑦ 末法万年特留念仏篇……………	日比野 俊 道…………	(11)
南太平洋に散華した英霊よ安らかにく上>……………	山野井 貫 琇…………	(14)
念仏・人と歴史⑦ 三日月上人とその弟子……………	平 祐 史…………	(20)
書評「仏教の生活質問帳」……………		(23)
異僧真覚〈第十八回〉……………	柴 田 六五郎…………	(24)
浄土宗の国宝「勅修御伝」……………	田 中 祥 雄…………	(28)
「道」東塔への道……………	高 橋 良 和…………	(30)

「二期のいのちくれやすし」



勅修御伝と言って、法然上人の御一代のことがらを述べた伝記がある。その中の上人の御ことばの中に、このことばがある。「花のいのちは短かくて」の林美美子の例のことばがあるが、人生を真剣に考えた人にはこのつきつめたことばが自然に生れる。一期のいのちとはわれら一生の命ということである。愚生なども古稀という七十年の歳月を重ねきたたが、なんとその一生のむなしく感ぜられることか。暮れやすきその日その日をただただ重ねてきた思いで一杯である。

おもてむきの今の繁栄の時にあつては、くれやすき日日をむなしくおくる人が多いことであらう。この繁栄もやがてはゆきづまる時がくるかも知れまい。ただ空しく時に追われてすごすことは、生涯をうつろなものにするにちがいない。上人のこのさりげないおことばに、人生の真実に生くべき強い要請がふくまれている。静かに念仏する時の心の安らぎの強さよ。

(良)

最高光明 のお方



函館称名寺住職

須藤隆仙

池の水 人の心に似たりけり
濁り澄むこと 定めなければ
宗祖法然上人様のこの御歌を、こよなく痛く感ずるこの頃
ではある。

一体、法然上人様は、なにを以っての故に、浄土宗をお開
きになられたのであろうか。開宗八百年を迎うるに当り、今
更ながら、そのようなことをさえ、考えあぐねる私でもある。
世はいま、親鸞聖人をして「日本最高の思想家」といい、

道元禪師をして「日本最高の哲学者」と称し、弘法大師も、
日蓮聖人も、それぞれに「最高の……」と喧伝されている時
である。

しからば、法然上人様は、最高のなにに当らせ給うお方な
のであろうか。そんなことをもまた、暗愚の私は、しきりと
詮索するのである。

たまたま、小学、中学など、私の遠き先輩にあたる亀井勝
一郎は、『私の人生観』（S39文芸春秋社刊）のなかで法然上
人様の御事にふれられ、「選択本願念仏集が中心ですが、彼
の言葉を伝へた語録があります。これは非常に面白いもので
す」といつているのである。

亀井勝一郎が、つぶさに上人様の語録を読んでおられたの
も驚きであるし、さらにまた、これを「面白い」と受けとっ
ていることにも、頭が下るのである。

この場合の「面白い」とは、勿論「おかしい、滑稽」とい
う意味ではありませんまい。

それはおそらく、彼の兼好法師が、上人様のお言葉をもっ
て、「尊し」といつているのと同義であらう。果して手許の
内海弘蔵先生の『徒然草評釈』によれば、「法然上人の、そ
のいわれたことばのおもしろく、尊く、いかにも味のあるの
を誉めていうたのである」とあるのである。

「面白い」という言葉に囚われて、いま少しく『広辞苑』など繕いてみれば、その第一義に「目の前が広々とひらける感じ」とあるのである。そしてまた「目の前が明るくなる感じを表わすのが原義で、もと、美しい景色を形容する語」ともあるのである。

さすればそれは、「光明」の作用でこそあろう。光明に照らされたその人の、直ちなる感懐こそ、「面白い」ということに外なりません。

これである、これである。法然上人様こそ、最高の「光明者」であらせられる。その語録に遭うて、目の前が明るくなるのは、上人様こそが「最高の光明者」であらせられるからである。

そう思つて、さらに想いをめぐらせば、上人様の御肖像画を開八のポスターに印刷して、檀家さんに配布したところ、そのお顔から後光がさしておられるといつて、なかには部分を切り抜いて、小額に掲げる方もあった。

それはまた勅修の御伝にもうかがえる。その八巻に、元久二年四月五日、関白九条兼実公の館を退出せられる時、「上人地をはなれて、虚空に蓮花をふみ、うしろに頭光現じて……」とあるではないか。

なればこそ、天皇様方が贈られた諡号が慧光菩薩（後鳥羽

天皇）、光照大士（後奈良天皇）、円光大師（東山天皇）、明照大師（明治天皇）など、光明の御名であつたことも、偶然ではありますまい。

まことに、上人様こそ、み光りのお方、光明のお方、人々を明るく照し給われるお方なのである。

だいぶ前にNHKのラジオ放送に、「光りを掲げた人々」というのがあつたが、「最高の光りを掲げた人」こそ、法然上人様その人であつた。

そこで冒頭の「池の水」の御歌に話を戻そう。ここに歌われている御心は、猿の動きの如く心定まらぬ凡夫の姿である。定心の聖道人よりは、不定心（散心）の凡夫のほうがいかに多いことか。上人様はむしろ人間のすべてを、不定心の凡夫の真実にとらえられた。

しかしその、心定まらぬ凡夫も、念仏すれば西方の浄土に往生して、成仏するとお示しになられた。その成仏とは仏性が開発することであつて、『選択集』も実にこの仏性開発を問題の出发点とする。

仏性の開発とは「人間に於ける至善への可能性の発動」である。その可能性（仏性）は、法然上人様のみ光りによって発芽の道を知った。開宗八百年は、人類が至善への可能性を発動する大運動でなければならぬ。



若い人達よ!!

モテル人になろう

北山 良祐

(静岡県焼津市光心寺住職)

年若いなら人生航路の長旅で、汚れもつこうから嫌がられたり、嫌らわれたりする面もできても致し方ない。だが、好々翁という言葉もあるのだから、人に好かれる人柄の老人もあることであろう。できれば私は、そうなりたいたいものだと思っている。老人福祉の強く打ち出されている世の中、福祉されることを老人の権利としな

いで、老人に接したらその老人を、何とはなしに、労ってあげたい。親切にしてあげたい。つとめて話しかけてみたい。そういうような感じを若者に抱かせるようなムードをもつ老人になりたい。人生を終わろうとする時、多

くの人から、そのような手が、声が、態度がさしのべられるということは何と倅せな人生の終焉であろう。

年若いなら、そういうふうになりたいと念じて、先に述べたように、人生の汚れをもつ老人であっても、先づ、そのような美しいものは失せても、芽生えるということは先づ六ヶ敷しいといっても言い過ぎになるまい。それならば、そのような老人になるには、どうしたらよいのであろうか。それは、いうまでもないことながら、若い時分の心の向け方次第であるといえると思うのである。

今時Ⅱ先が何うなろうと今Ⅰ只今の今がよければそれでよいのだといった風潮の時代Ⅱそんな気の長いことをいったって受けとめてくれる若者は少いかも知れない。否、全くないかも知れない。然し、この拙い文を読んでもくれる若者であるあなたは、ことによったら例外な人も知れない。そのあなたに私は語りかけた。

地球上に四十億に近い人が棲んでいる。その気の遠くなる程数多い人の中で、モテル人とモテナイ人との二通りがある。このことは人間が、この地球に棲みつづける限り、永遠に続く現象である。モテナイ方がよいという人もあるかも知れない。モテル・モテナイなんていう人間的戯事には全く関心のない人もあるかも知れない。私なども年の関係からか、ダンダンその方に向かつていつているかも知れないと思うようなことの折々ある昨今ではある。然し、真の意味で嫌われることは好まないし、人に好感されることの方が矢張りうれしい。だが、そのような感情に全く係りのない人も数多い人類の中にはあるかも知れない。然し、そのような超人間的な人のことは今は言外として置いて、先づ、お互いに一般の人間と

いう考え方に立って話をすすめてみよう。

モテル・モテナイという言葉の響きは、男女間のイヤラシイ(?) 関係の表現から、異性関係でなく対人関係におけるその人の人間関係のあり方まで含めていると思われる。

今とりあげたモテル人という意は、後者を指してのことである。

昭和四十年の暮、得がたいご縁をいただいて私は、インド仏跡参拝をさせていただくことができた。カルカッタでも、パトナに近い王舎城でも、ベナレス、サルナト(初転法輪の地)、クシナガラ、ルンビニー等々いわゆる四大仏跡において感じたのであるが、特にボンベイに近いアジャンタへ行つた時に痛感したのであるが……。

十二月十九日、石窟寺院で世界的に有名なアジャンタⅡ今から百年程前に英国士官の探検隊によって発見された仏教遺跡Ⅱへ着いた。一つが高層建築のビルに相当する位の大きさであるものが二十九もあるスバラシイ遺跡なのである。従って、見学・観光の人がかなり来っていたのである。日本でいうなら、さしづめ修学旅行といった

ようなグループも来ていた。ガイドらしい人が所々に止まっては説明(？)。語学に弱い私には無論解らない。然し、話す人・聞く人の表情で大体のことの察しはつく。その女学生の一団も、ガイドの説明を聞きながら顔容の違う人種の違う私達に時々、横目で視線を向けるのである。日本人かしら？といった迷惑をもちながら……。

ガイドさんのお話が一段落したらしい時、私は私のポケットから風船をとり出して、ふくらめて、一番近くにいた女の子にくれてやった。日本の女学生だったら見知らぬ他国の人から予想もしなかったものを突然にもらうのだから、恐らく顔を真紅にして恥づかしそうに、もらっているのやら、わるいのやら躊躇しながらうけとるであろうが、外人である彼女の女は、何の抵抗もなく、恥づかしそうな素振りもなく、平気で受けとったのである。そして堂々と「サンキュー」いっておった。でもさすがに、うけとると隣近辺の同僚の顔を見廻わしていた。矢張り、てれくささがあるであろう。インド人だって、日本人だって女学生ということであれば大同小異だと感じたことである。一人がもらえば、今度はわたくしの番

だというわけで手をさし出すのも地球上の人間略々同じような神経で、同じような所作をするものである。女学生のグループのメンバーも手をさし出した。その中から一人がツカツカと歩いて来て私の寸前で手をさし出した。引率の先生である。一つ上げた。するとその先生は、「どうだ。私もこの通りもらったのだよ」と得意顔の表情であつた。そして私に向かって何やら、しゃべりまくっていた。恐らく御礼をいいながら、風船について彼女の女のある知識をしゃべったのであろう。

外国へ行つて、私にしゃべりよつて来てくれるような人はあろうはづがない。加えて言葉が通じないときたら尚更のことである。それにもかかわらず、そのように私に話しかけて来てくれるということは、而かも若い女の人である。これは全く、風船の賜である。事実、風船のお陰で私は一行二十一人の中で一番モテタのである。

いよいよ、仏跡参拝に参加が決つた時、私は仏跡参拝する私の心得の一つとして、お釈迦様の説かれたみ教えの一つでもいいから実践したいと念じたのである。そして、その実践の一つとして「布施」を撰んだのである。

仏跡にタムロしているかも知れぬ子供等に何か施したいと考えた。海外旅行者には荷物の重量制限がある。やらと鞆の中につめ込んだのでは仏跡に参拝する時の私の死出の柳の装束である麻の衣・袈裟一式が入らなくなってしまう。あれにしようか、これにしようかと考えぬいた挙句、持っていく時は小さくて施す時に大きくなるもの、そんな調法なものがあるだろうか。若し、あったらそういうものになりたいと思ひ立ち、拙寺で年中行事の折々に墓参の子供にあげている風船を思いついたのである。『施す』ことを目的にもっていった風船である。この風船によって思いもかけないモデル結果を得たのである。

『職人が集まらなくて困ります』という親方の愚痴を聞くことが、よくある。親方であるからと思つて親方賃まで儲けてしまわないようにして、その親方賃を職人衆に分配してやったら、どうだろう。そうしている所には人手不足の折柄にも結構よい職人が寄つて来ているようである。世の中は、お金ばかりで何うにでもなるというのではないけれど、『布施』の心を持ち合わさない人に、

他人さまが親身になってやつて来てくれるということは先づ有り得ないと思つてゐる。

『他人さまが喜ぶことを喜んでやれる人になろう』ということを、モットーにして昭和二十三年から仏教青年会にありそみ会を続けているが、その男女青年達、何かというと、じきに風船をくれてやることを考える行事を計画する。くれてやる風船を一所懸命ふくらまし、そして、来る子、来る子に、いい子になれよ!!と言葉をけながらくれてやっている青年達の横顔、何とスバラシイことだろうと心で合掌の想いである。檀信徒の方にも、この青年達には測り知れない親愛・敬慕の心をよせてゐる。

『施し』の心こそ、モデル人への大切な要素であると思ふ。自分さえよければよいという今の世の中、時には他の人への心遣りをもちたいものである。次代を背負う若者、次代が本當に福祉の社会になるために『施し』の気持ちの培ひの努力をしてほしいものである。その努力は、必然的にモデル人への道行きになると信ずるのである。



御法語と私

—法語に導かれて—

遠田 弘俊

(浄土宗布教師・東京慈眼院住職)

私は九歳でお寺へ入って五十余年の間、毎朝のお勤めに欠かさず読ませて頂いている。元祖大師の御法語は、何処を拝しても有難いお言葉ばかりであります。その中で何といっても、一紙小消息と、一枚起請文は最後臨終のその時まで、心の奥に祖師と共に生かさせて頂いている、実感の籠った御法語だと信じているものであります。特に一枚起請文は浄土宗の信者であってもなくても、広く知られている程の有名な御法語であります。一紙小消息は私達浄土教徒にとって、ほんとうに

有難いお導きが説かれていると思います。

幼少の頃は只何となく誦まろんじて、意義も弁えず檀家へお参りの折り等に有難そうに読ませて頂いたものですが、歳を経るに従って、自然に何とも言えぬ有難いなあ、と思う心が湧いて来ることを覚えるようになりました。勿論幼少の頃は、まだまだ教義だの、安心だのと知る由もなかったのですが、静かに朝の勤行の折りに「末代の衆生を往生極楽の機にあててみるに……」と誦んでいくうちに、時には何か胸の中に熱いものが突き上げて来る様

に思ったこともありました。それは私にほんとうの信仰があったとか、それがどれ程私の一生に大きな影響が起るであろうかと、意識していたわけでもなかったと思うのです。それでも此の御法語は読めば読む程「そうです、そうです」と頷くことの多い御文であるのです。此の度は全文を記すことを略しますが、その一節に「うけがたき人身をうけて、おこしがたき道心を発して、離れがたき輪廻の里を離れて、生れがたき浄土に往生せんこと悦の中の悦なり。」とあります。私はいつも此のくだりに参りますと、元祖大師がどんなに此の事をお悦びになったかとしみしみと感じられるのです。

御法語のたぐいは論とか釈といった難しい字句から、できるだけ平易な言葉で説かれたものが多いので、特に平素折りに触れて対機説法的に述べられたものが多いのです。その点私達は常に御法語に接することは大切なことでありましょう。今此のお言葉を私の反省として頂きました時、私一人がよくぞ人間に

生れて来たことだと、熟々と不可思議の縁を悦ばずにはいられません。今の私が八百年の昔、あの動乱の世に出生なされた元祖さまが父の非業の最後にお遭いなされ、而も偉大なる一生を送らるる過程を拝する時、ただ人ではなかったことではありますが、まことに仏の再来であつたであろうことの数々が、こうしたお言葉の中にしみしみと頂けるのであります。

いうまでもなく大師の御一生は、万人普益の念仏を弥陀本願の強因に依つて、証りの教から救いの教に展開下され、今の今、手を合せ、忘れられていた心に弥陀頼む信の一念を発して、永い永い常夜輪廻の迷いから覚めて、浄土往生の素懷を遂げ得られることの喜びをお与え下された事であり、此の事が末代の私にとって何ものにも代え難い喜びでなくてはならぬことでありましょう。

私はいつも此のお言葉の中に五つの喜びを感じさせて頂いております。一つには人身をうけたことの喜び、二つには阿弥陀如来の本

願にあい奉ったこと、三つには発し難き道心を発し得たこと、四つには離れ難き輪廻の里を離れること、五つには生れ難い浄土に往生できること、これ等五つに就いて一々お話しれば限りないことですが、浄土信仰に生きる者にとっては、何ものにも劣らぬ悦びと申すべきであります。こうして小消息全文を拝読致す時、元祖大師はほんとうに血の出るような御苦勞の上、善導大師の觀經の疏から「一心專念弥陀名号云云」の一文によって、凡夫往生の真意を見出されたことは何といつても有難いことであります。

諺に「コロンブスと卵」の譬がよく引き出されますが、多くの先徳が凡ゆる御苦勞の末に遺された教の中でも、わが元祖大師程すべての階層に仏教の真髓を徹底的に浸透なされた方もないと思います。これこそコロンブスがアメリカ大陸を発見した故事に、優るとも劣らぬ精神的な大発見だったと思います。上人以後に出られた祖師方にも多くの新しい教を説かれた方々もありますが、恐らくは八百

年後の現在まで上人の説かれた万人救済の教以外に、何ものもないと申せましょう。その意味でも念仏の元祖と仰がれる所以であり、私達が日頃何気なく称えれば浮土に往生ができるのだ、という安易な心でいられることが当り前のことの様になっていますけれど、此の容易なことが容易でなかった遠い八百年前には一大事件であつたわけです。上は天皇、公家を始め、碩学泰斗は勿論、下は木こり、草刈り、海人漁人に到るまで、救いの中に滔々と流れる大河の様に包容せられた革命的念仏の声が、わが宗祖に依つて導かれたということの悦びは、此の御法語を朝夕拝読することに依つて深々と身心に漲つて来るのであります。

私は今にしてほんとうに浄土宗の中に育てられたことを有難く感謝すると共に、一人でも多くの方々の心の中に浄土の教が徹底して、宗祖上人の真意に反かないことを深く反省させて頂く次第です。南無阿弥陀仏、十念、合掌。

選釋集講話

第六章

末法万年特留念仏篇

日比野俊道

(大正大学助教授)



前章では念仏大利といって、これによって一切の衆生を救うことができる、貴く而も大きなスケールの念仏について理解することができた。これを空間的な永遠性と考えれば、この章は時間的な永遠性について述べられているといえるであろう。念仏が過去のものでなく、現在から遠い未来にわたって私共の内部にあるなら、これ程力強い心の安らぎを覚えることはないであろう。

無量寿経の下巻に

「他の經典が、將來もなくなってしまうてもこの經典だけは必ず残そう。だからこの經典にめぐりあえた者は、心の願い通りすべて仏の道に入ることができる」とある。

思うに法然上人ほど自己省察の鋭い方は少ないし、又それがいつも下積みの、幸せうすい民衆の上に迄延長されて、大きな慈愛の心になっていたのであるが、御自身、ほう大な經典の中からこの無量寿経を選びとられたのは、勿論この經典が他に較べて、勝れているからという理由でなく、私共の悩み、願いを、親身になって捉え

ているという理由からであろう。他の經典がなくなるとは、その經典の教え通りに修行する方法とか、或いは修行に堪える者がなくなるかも知れぬとも考えられ、その時にこそ、一そうこの經典が絶対の威力を発揮しなければならぬであらう。

善導大師の往生礼讃には

「一万年たつて三宝がなくなつても、この無量寿經のみ残ることなほ百年、そのとき仏のみ名を聞いてひとたび念すれば、みな阿彌陀仏の淨土に生れるであらう」

とうたっているが、この念仏を永久に残す為に、特にこの經典を選ばれたことはよく理解できるのである。

次に具体的に、四つの比較がなされている。

一 聖道門
浮土門

二 十方仏国土
西方淨土

三 弥勒菩薩の兜率天
阿彌陀仏の淨土

四 余一行
念仏一行

方法や場所に関しての、まことに細かい点検の仕方である。何れも機縁の深淺に焦点を当てて明快な結論を与えられているが、先にも触れたように、救われる側の機根、つまり素質や能力についての、キメの細かい視察があったればこそ、必然的な左項の「選び」がとられたのである。ち密な価値判断などという言葉では到底追いつけぬ周到さというべきであらう。

さて、では一体何故釈尊は特りにこの經典のみを留めようとなさるのか。

法然上人はここで善導大師の意図を推測して、念仏往生の本願を説いた唯一の經典である無量寿經であるから、特に之だけ残すのであり、それもひとえに釈尊の大慈悲によるものである、と述べていられるが、私共にとつても又「順彼仏願之故」という文字が、今まさに強大な重量感をもって迫ってくるのである。

法事讀の一節に

「弘誓は多く四十八なれども、ひとえに念仏を標榜して最も親しとなす。人能く仏を念すれば、仏また念じ給う。専心に仏を想えば、仏人を知り給う」

とうたわれている。

聞かぬこそ 恨みなりけれ 弥陀呼べば

答えは常に あるべきものを

原文は正像末を通じ、三時普益の大利ある念仏を勧める經典の意図を強調してこの章を結んでいるが、私共には過去、現在、未来という言葉の方が理解し易いのではないだろうか。

最後にこの章と関係のある内容を、法然上人の御説法と御返事からとり出しておく。

「かの秦の始皇が書を焼き、儒者を埋めしとき、毛詩と申す文ばかりは残りたりと申すこと候、それも文は焼かれたれども、詩はとどまりて口にありと申して、詩をば人、そらに覚えたりける故に、毛詩ばかり残りたりと申すこと候をもて心得候に、この經とどまりて百年あるべしというも、經卷はみな隠滅したりとも、南無阿弥陀仏と申すことは、人の口にとどまりて百年迄も聞き伝えんずる事と覚え候、經というは又説くところの法を申すことなれば、この經はひとえに念仏の一法を説けり。さればその時一念を開きて皆當に彼の國に生ずることを得とは、善導も積し給える也。これは秘藏の義なり、たやすく申すべからず。」

「念仏の行はもとより有智無智をえらばず弥陀の昔の誓い給いし大願はあまなく一切衆生の為なり、……有智無智、善人悪人、持戒破戒、貴賤男女も距てず、もしは仏の在世の衆生、もしは仏の滅後の衆生、もしは釈迦末法万年の後に、三宝失せての後の衆生まで、ただ念仏ばかりこそ、現當の祈禱とはなり候え。」

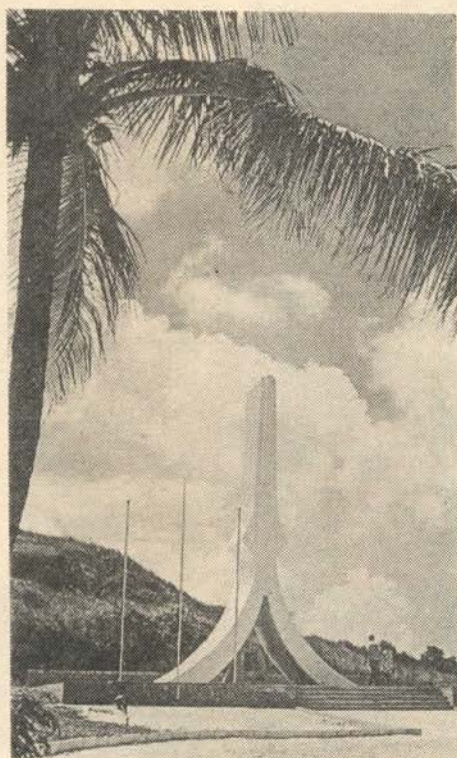
南太平洋に散華した 英霊よ安らかに

=第16回南太平洋戦没者慰霊団に参加して=

前書きとグアム島へ

今次の大戦は北に南にと日本の大活躍にもかかわらず
敗戦という憂き目を見て、百万にもぼる大犠牲を出し

〈上〉



グアム島ジーゴに建立された南太平洋
戦没者慰霊塔

山野井 貫琇

(長野市常然寺住職)

たのである。なかでも南の島に於ては五十万の将兵が海
の藻屑と消え、点在する島々には今なお当時の日本人白
骨がそのまま放置されているという。戦没はしたが魂は
空に迷う方々が多いことを考えると全く断腸の思いがす
るのである。日本政府は今なお一人の生存者に期待を寄

せて懸命に探すのであるが、このような限らない戦没者の救済にも更に思いを馳せて欲しいと考えるのは私一人ではないはずである。

このような時世にあって財団法人南太平洋戦没者慰霊協会は南方における散花者の供養につとめて既に第十五回。多くの英霊もようやく鎮魂されつつあり、今回第十六回目を迎えた。このたびはトラック諸島専門の慰霊である。四月十六日(日)から二十一日(土)まで約一週間の訪島がなされた。顧みて昭和十八年は後半から次第に太平洋も後退の一途をたどり、各島々には星条旗がへんぼんと翻えるようになった。昭和十九年初にはガダルカナル・ラバウル・ニューギニアとトラック諸島の前線を攻略した米軍はミッチャー少将の率いる第五十八機動部隊をしてトラック島へ怒とうの如く押し寄せたのである。時あたかも二月十七と十八日、難攻不落を誇るトラック島の上空襲ではその時、軍艦九、船舶三十四、飛行機二百七十機を失い、地上の死傷者六百名、海上兵員千三百にのぼったといわれている。このトラック諸島こそ宇品を去ること南へ三千五百キロ、赤道に近く毎日が三十度

を越す常夏の島である。あれから約三十年の歳月が流れた現在はずっかり緑の島に蘇っているであろう。だがその島と海にはいまだに多くの魂が迷っている。そこで訪島慰霊に思いを致す者がここに集った。当時富山第六十九連隊と松本第五十連隊はおそらくこの島が最後であった。慰霊団は富山県の六名を先頭に青森、秋田、埼玉、茨城、千葉、神奈川、愛知、東京、そして長野県二名と都合二十六名であった。この中には戦時中この島で活躍した者が数人あり、外はこの島及び付近において父を夫を兄弟を失った遺族の方々であった。出発より思いを同じくする団員は毎日毎日それが真剣そのもので涙と感激の連続でした。

四月十六日(月)七時三十分、羽田集合、結団式を行ない、十時十五分JAL941便にて出発。機は一万乃至一万二千メートルの上空を時速九百二十キロのスピードで飛ぶと機内の放送で聞いた。約二時間の後には硫黄島上空通過、幸い快晴だったので手にとるよう美しく展開、中心の山並みには緑もみられたが、ほとんどが赤膚に見えた。機上では時計が一時間早まったので、午後二時二十分グアム島アガナ空港に到着した。直ちに同慰霊協会が昭和四十五年六月に幾多の困難を克服して建立し

た、ジーゴ慰霊公苑に参り、空を圧する白亜の合掌塔に服部師導師にて心から五十万戦没者の冥福を祈った。随行員の桑田さんからは当時の悲惨な戦況を聞き、帰路恋人岬に当時の苦戦を偲び、今晚の宿アガナのクリーフホテルへと到着した。玄関わきのパンの実は一層トラック島への旅情を誘ったのである。

青島の巻



夕闇せまる春島の慰霊祭

四月十七日（火）九時、アガナ空港を出発したコンチネンタル機は、大体八千メートルの雲の上。下には紺碧の海にうち寄せる白波の姿が美しくみえた。一時間三十分の後にはトラック諸島が見えて、まもなく大きく左旋回の後春島のイラス空港に到着した。税関といってもトタン屋根に椰子の葉の壁、名ばかりの検査である。島民がたくさん出迎え、昔ながらの衣服で女や子供が多く、花の香漂うヘッドバンドを皆の頭上に載せて親意を表してくれた。後でわかったのだがトゲイコサムその他これから案内してくれるコンパニーも来ていたのである。まもなく島民ヨシミの運転するマイクロバスは我々を米人経営のコンチネンタルホテルへと案内してくれた。ここはネアウエ村といつて戦時中は日本海軍の水上基地のあった海辺で大変美しい、が今もって当時のトーチカの跡が無気味に残っている。

午後は、代表五人で支庁長を訪問、わが団来島の使命を告げて供養塔婆建立の地を要請した。支店長代理は極めて友好的であったがさすがに役人らしい返答「それぞれの土地には皆持主があるので、その地主の了解が得られるならばどこに建てても一向差しつかえない」という。内心困惑の心で退庁。続いて同島居住の日本人事業家、

森太郎、相沢進両氏にも訪島のあいさつに立ち寄り協力方を懇請したところ、森氏の従業員アーデンは自分の土地に供養塔を建立することを積極的に快諾してくれ、相沢氏からは明日より各島航行の発動艇提供のこれまた積極的発言を得て勇躍したのである。直ちにホテルに待つ全員に連絡し、夕暮れにユラス村の中村棧橋に近い海の見える「その昔、日本の兵隊さんがここで沢山死んだ」とアーデンの言う場所を春島の墳墓の地と定めて椰子樹の草中を刈り開き慰霊祭になった。内地から持参の協会の塔婆を建て、香花供物を捧げて導師川元氏による読経、続いて梁田さんは田中総理大臣・山野井協導師は長野市長の弔慰文をそれぞれ代読した。トラック島に来て初めての慰霊祭でもあり、夕闇ともなっていたこともあって、感涙は草を濡らし嗚咽の声は樹蔭に響いて、おそらく誰もが時に満足したことであろう。

やがてホテルに帰った全員は一室に集合、梁田さん進行的のもとトラック島経験者による旧懐談となった。私は水曜島から夏島へ、そして二月十七・十八日激戦の様子を、窪田氏は囚人部隊引率者として飛行場づくりの苦心

談、大森氏は海軍通信隊員として得た当時の日本海軍損害の情報など開陳となり、今から三十年前のトラック諸島の有様を追憶し当時を心の中に偲んだのである。遺族の方々は夕闇の感激と夜の旧懐談によって明日への思いが一層募りゆく夜を明かしたことでしよう。

夏島の巻

四月十八日（水）八時三十分頃相沢進氏提督の船に乗った一行は、船首に寄せ書きをした日の丸旗を翻して夏島へと向った。追い風のため旗は前方に翻り夏島に心を寄せる私の心の道案内のようにも思われ、全員の心も日の丸に集ってますます意気軒高であった。途中海上では経木塔婆と散華を海に投じて慰霊の意を捧げ、夏島近くでは往昔の輸送沈没船富士川丸のマストに船を停めて心からご冥福を祈った。やがて船は夏島艦隊棧橋に到着。目的の地をめがけて皆の心はいやが上にも逸っていた。歩いていく者を島に二・三台しかない軽自動車のトラックに乗った数人が先行するのである。私も莊嚴準備のため便乗し、途中公会堂式バラック小屋で酋長と会見訪島の仁義をつくして後、私にとってはもっとも懐しい心



祭靈慰の島夏った整厳莊風方南

の古里ララ村へと向ったのである。道路の左側に昔ながらの海軍基地の石標をみ出した時には涙がとめどもなく流れた。これより坂を登る参道左側には、海軍の戦没者のみならず、多くの陸軍その他の霊魂が鎮まることを思った時、徒らにその辺りの土も踏んではならないのだという厳しさが強く私の胸を打った。この坂の百メートル程上に平地があり、そこに高さ一メートル幅三メートルほどの石台上に御影石をはめ込んだ慰霊塔がある。これは終戦後残留日本軍によって建立されたのであるが、惜しくも島民のいたずらか表面の文字は削られて定かではなく、ようやく左から「戦没者之墓」と判読してみた。付近の島民は綱に椰子の葉をつるした厳飾を整えて一行を待っていてくれた。さっそく持参の塔婆や供養品を供えて法要を執行した。多くの島民の見物もあり、晴天のもと導師を司る私の回向の疏も感激に震え、自分にとっては最も感激の慰霊祭が行われたのです。あの戦友青木君も、赤頼君も、そして多くの補給中隊戦没者、名も知らないあの時の戦死者がこの地下に多く眠ることを思い浮かべた時、再び涙がとめどもなく頬を伝ったのである。この小さな平地の片隅に島民はすでに椰子の実を用意して待っていてくれた。読経の後さっそくそのご隨喜にあ

施本 『ひがん会』

価一五円

秋季号

B6変型・表紙共 一二頁

送料実費・二百部以上一三円

◇ひがん会は、わたくしたちに、真実の生き方をおしえ、豊かな心を養いそだててくれます。

◇遠い昔からわたくしたちの心にかよう行事を通して、ゆかしい心持ちを育てたいものです。

◇ひがん会についてのやさしい解説の施本としておすすめいたします。

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
電話東京(〇三) 二六二―五九四四

◎ご用のむきは早目にお申込み下さい。

ずかったのであるが、一口飲んで後はそつと黄泉に眠る戦友にと人知れず足もとの地上にと流したのです。

その後、近くのコサムの家に参つて山をなす島民料理を十分にご馳走になった。焼肉、パンの実、さつま芋、バナナ、パイナップルなど約三十名がせいぜい精を出して食べたのですが、群がりくる蠅にも始終困惑した。昼食後は彼らの案内でマセラン村でもと設部隊跡をしのび、立派になったチョンチョン橋を渡つてウエドットン村に到着。ここはおそらく夏島の文化の中心であろう。

学校あり、一軒の売店あり、そして広場では多くの島民が野球を楽しんでいた。このウエドットン村にはその昔、司令部があり、柏四五六部隊が駐屯し近くの山上には砲台あり、トラック神社も在ったが、現在では草を分けてわずかにその跡があると、案内の島民佐津雄が話してくれた。やがて帰路栈橋近くの左側海辺のジャングルの中に赤くさびて折れ曲つた昔の重油タンク姿も見られ二月十八日の激戦に敵弾命中、油は海上にまで流出して三晩四日も燃え続けた當時を思い出して感無量。あの時死ななかつた身の幸いをつくづく感じたのである。



念仏人と歴史

(七)

三日月上人とその弟子

平 祐 史

(仏教大学助教授)

—

足利義満が京都の室町に壮麗な花の御所を営んで、優雅な生活を営んでいた頃、下総国北相馬郡（茨城県）の横曽根に庵を結び、専ら浄土宗の著述と学徒の教養に心をくだく、四十歳を少しすぎた上人があった。この上人の眉間には三日月形のきづあとがくっきりとついていたので、人々は三日月上人と呼んだ。そうして、上人のおそばには幼名を千代丸と呼んだ二十位の若いお弟子がおられたのだ。

このお二人こそは、のちに浄土宗中興の祖と仰がれ、浄土宗で最も大切な五重相伝の作法をととのえられた聖間上人とそのお弟子の

聖聡上人である。また横曽根の庵は談義所と呼ばれ、徳川時代に完備する浄土宗東十八檀林—今の大学にあたる—の沿革をなすものであって、近代に至っては、東京で開かれた宗教大学、そして今日の大正大学に、また京都にあつては、仏教大学にそれぞれ学統が引きつがれ、浄土宗の学徒の教育機関として、また仏教精神を基調とする人文科学や社会科学の研究の総合大学として、わが国の教育、學術の振興の一翼を担っていることは、広く知られている通りである。

このように両上人の投ぜられた一石は、後世の浄土宗を導びく大きな源泉となり、その功績は忘れることはできないものがある。ここに両上人の事蹟を簡単に紹介してみたい。

聖岡上人は、暦応四年（一二四一）の奇しくも宗祖法然上人の正当忌日に当る正月廿五日、常陸国久慈郡岩瀬（茨城県）に誕生された。ご父君は、白石志摩守守義と申し、常陸国の守護佐竹氏の有力な幕僚であった。当時は朝廷が南北兩朝に分かれて激しい争いが相つづいている時代で、佐竹氏は北朝方に与みしていた。常陸周辺の諸国には興良親王・北畠親房などを始めとする南朝側勢力も強く、この地方でも双方の抗争は激しくなり、聖岡上人のご父君も豊原刑部と戦って討死されるという悲劇がおこった。ときに上人はわずか五歳であったが、母君とともに危難を逃れ、一時身をかくされたが、八歳のときに瓜連の常福寺で実上人のもとで出家されることになった。

上人の生い立ちは、あたかも法然上人の幼年期の生い立ちと大変よく似た境遇であったようである。時代こそちがえ、いづれも社会的変動期にあたり、しかも武家の出身であり、ご父君が戦闘の中で討死され、その上幼年の身で入寺するという、いわば不幸な生い立ちであった。聖岡上人は、この不幸な生い立ちを、法然上人の生い立ちになぞらえて了実上人のもとで自からの修業に精進されたものと思われる。ついで浄土宗白旗流の正統をうけつがれる蓮勝・定慧の両上人について宗義や円頑戒の奥義をうけつがれ、また他宗の学者を訪ねて、密教や天台・禪など広く仏教の研鑽をつまれたのだった。

この頃の仏教界は、足利氏の保護をうけて、とくに禪宗が盛んであり、京や鎌倉では隆盛をきわめていた。これに対して浄土宗は、法然上人以来数代をえて、お念仏を唱える民衆は多くなってきたとはいえ、浄土宗の奥義をうけてもまだ正規の僧としての地位を認められず、正規の僧となるためには、浄土宗以外の宗派の作法にしたがわねばならなかった。こうした浄土宗の事情を知られた聖岡上人は是非ともこれを打開して、独立した一宗として認められる浄土宗に組織せねばならないと痛感されたのだった。

聖岡上人は、先づ宗祖の教えを当時の時代精神にてらして組織することによって、今までの浄土宗で最も不備であった宗脈・戒脈の伝承を明確にし、これによって宗祖以来の法灯を正しく引き継ぐ、真の浄土宗侶の養成を期せうと努められたのだった。この裏づけをするために上人は、専ら著述と研究に努められるわけであるが、それは「二藏頌義」「顯浄土伝戒論」「教相十八通」などという書物になってあらわされるのである。この頃、聖聰上人がお弟子として上人の門に入られたのである。

三

聖聰上人は、下総の守護千葉氏胤の息として貞治五年（一三六六）に誕生し、幼名を千代丸と呼んだ。千葉氏は常陸の佐竹氏と俗縁があり、また氏胤は念仏信者であつたらしく、かねて聖岡上人の道風を慕っていたので、永徳三年（一三八三）上人を城下の明見寺に招

き教化を依頼していたのだった。これが縁となって、千代丸は横曾根において上人のお弟子となり、名を聖聡と改めたのである。

聖聡上人は、入門して間もなく師の聖岡上人が心血を注がれておられた「二藏頌義」を授けられ、さらに明徳四年(一三九三)、聖岡上人の発案になる五重宗脈を始めて授けられ、ここに聖岡上人の長年の理論が実際に応用されたのであった。

聖聡上人は五重相伝を授けられると、師のもとを辞して、江戸貝塚に増上寺を開かれたのだった。増上寺建立にあたっては、聖聡上人の出身である千葉氏一族や佐竹氏が積極的の後援し、また関東の多くの武士たちも帰依して、その功を助けたのである。さらに小石川に一庵を結び、ここに師の聖岡上人を請じた。のちの伝通院である。そうして聖聡上人は増上寺を拠点として、多くの弟子を集め教育するとともに、師聖岡上人の主唱された五重伝法を実際に活用されたので、ここに独立宗派としての浄土宗の僧侶が多く養成されることとなり、教団意識を高揚する素地をつくりあげたのである。

四

聖岡・聖聡両上人の事蹟は、浄土宗の独立と教団意識を高揚し、宗祖の念仏の教えを確固たるものにするににあった。宗祖以来念仏の教えは、広く社会のあらゆる階層に受け入れられ、また僧となる者も多かったが、彼ら念仏者は必ずしも宗祖の作法を受け継ぐものではなかった。いわゆる念仏衆、念仏聖と呼ばれるものであった。南北朝の動乱の中で、彼ら念仏聖は諸国をめぐり、ときには戦

乱で破壊された無住の寺や村堂に掛錫して、堂宇を再興したり、村の葬祀をあづかるなど積極的に在地との定着化をはかっていた。しかし彼らは念仏衆または念仏聖であって、正銘の浄土宗侶ではなかった。いわゆる道心者であった。そうして当時の仏教界では、これらの念仏聖は浄土宗に帰属するものと見なされていたのだった。こうしたところから諸国に散在しすぐれた教化力をもつ念仏聖を浄土宗に帰属せしめ再教育することも急を要したし、また新たに浄土宗侶として志すものに正規僧としての地位を与え、宗祖の教えの正嫡とせねばならなかったのである。

聖岡上人は、こうした事情を早く見抜いておられたし、動乱の中にあっても次に訪れる時代や社会についても充分予見しつつ、五重伝法の構想がねられていたものと思われる。事実、聖聡上人が師の志をついで門弟の養成に努められた頃をさかいとして、浄土宗においては、全国的に大小の寺院の開創が始まるのである。この時期に開創をみる一般寺院の開創者の多くは、かつて回國遊行の聖であったり、名もなき念仏聖の系譜を引く人々かじめ、また、今まで宗派不明の村堂が寺院となって浄土宗と称するものもこの時期以降に多いことである。こうしたことによっても、両上人の教団指導者としての手腕がいかに発揮されたことを物語るものと云えよう。

このようにして、聖岡上人の発案になる五重伝法は、弟子の聖聡上人によって、実際に応用普及されることにより、教団意識の高揚に大いなる力を発揮することになり、今日にみられる一大浄土宗教団発展の理念的基礎がここに築かれたのである。

若林隆光 著

『仏教の生活質問帳』

すでに旧聞に属することかもしれませんが、近時、中山書房から出版されました若林隆光著『仏教の生活質問帳』という新刊書をご紹介したいと思えます。本書は昭和四十七年七月一日初版ということですから、確かに新刊紹介といいたしましてはいささか時期を逸した感がありますし、その上現在好評のうちに第三版が発売中ということですので、本欄で改めて取り上げる要はまことに薄いとは思いますが、いかにも時宜を得た好固の一書でありますので『浄土』誌読者諸賢にも是非一読をおすすめしたいわけです。

というのも、私たち日本人の日常生活を考えてみますと、仏教と関わりをもった事柄がいかに多いことでしょう。私たちの生活の場にいつの間にか刻みこまれていく仏教の行事や、その歴史の影響は、まことに深く根強く沈着し、畢竟私たちの心の在りようを形造っています。日々の生活のどんな

ささいな出来事も、つまるところは仏教の教えに由来したりまた導かれたりするものなのです。

もとより、このような日常的な事象や疑問についてはなかなか説明しにくいものです。まして、仏教の伝統的な教義をよく理解した上での平明な解釈はさらに至難な業であります。『仏教の生活質問帳』では、著者若林氏が、私たちのこうした日々の生活における仏教に関する折々の疑問に対して、一つ一つやさしく丁寧に解答を与えられたものです。中山書房の季刊小冊子『仏教の生活』誌に、読者からの質問に答えるという形式で、永らく連載されて来たものをまとめたものですから、その意味では正に読者と若林氏の共著の如きものであり、そのことは必然的に私たちのもつ小さな疑問への解答ともなっているのです。

春、夏、秋、冬の四項に大別された百八章の質問帳には、年中四季とりどりの仏教行事や仏教的事柄への平易な説明が施されています。本書は、私たちの日常の仏教基礎知識を得るために通読するのも結構ですが、むしろ簡便な辞書的な役割りものとして最適なポケット版であります。

発行所

B6版 一九五頁 価三二〇円
東京都文京区湯島2-14-2

中山書房



異僧眞覺

第十八回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

作平は又、妙春の像を甜めるように眺め廻していたが、「じゃが不思議なこっちゃ。尼さんを捨てた男と拾うた男が斯うしてめぐり逢うとは。これは尼さんの霊の仕わざかも知れんて。いや、きっとそうじゃ。それに違いない。そうじゃノ……」

不意に言葉を切った作平は、視線を眞覺に戻した。

「和尚さん。頼みがあるんじやが」

「何を？」

「ひとつ石に彫って下され。此の尼さんの、いや、観音さんじゃ。この観音さんの祠の前に印を建てるんじや。

さて？ 何としたらよからう？」

ゴロリと板の間に寝ころがった作平は右肘を立てて手

枕にした。そうしながら眼だけは返事を促すように眞覺の顔を下から覗き込んだ。

「ふむ。……此処は天ヶ瀬のかかりじゃな。此処に流れついたかノ。妙春も、此の像も。そうじゃ、天ヶ瀬、天ヶ瀬観音と云うのはどうじゃ？」

ガバと上体を起した作平は背きと一緒に、左の膝を一つ叩いた。真っ黒い不精髭の中から白い歯並みがのぞいた。

「天ヶ瀬観音？ うむ、そらよからう。そう決めよう。そいつを石に刻んで下され」

「しかし、俺は石に彫った事は無いが」

「いや、これ程の腕があれば」



天ヶ瀬附近に架かる宵待橋。昨年の家はこれの少し上手にあった。

＜高橋てるお版画＞

と、又視線を妙春の像に移した作平は、

「訳はないことじゃ。明日、上の村の石屋で鑿のみと鑿たがね、それから鉄槌かねづちも借りて来ますわい」

そのまま暫く思案を続けていた作平は、

「和尚さん。ついでに俺の墓も彫って下さらんか？俺ももう五十を越えた。後何年生きられるやら。よい機じゃ。因縁浅からぬ和尚さんに墓を刻んで貰えば本望じゃ。そいつを祠の側に据えよう。どうじゃ、不可んかい和尚さん」

作平の言葉は多少厭がらせのように聞こえぬでもなかったが、兎も角妙春を葬ってくれた此の男に酬むかいたい気が

持もあって真覚は引受けることにした。

「で、戒名は何とする？浄土宗では授戒と云うのを受けねば戒名が付けられぬ。お前さんはもう受けたのか？」

「授戒？ ともでもない。授戒なんぞを受ける金も暇もありませんわい。そりゃ又厄介な事じゃ。俺は何やら難かしい字を四つ五つ並べりゃ戒名になると思うとったが。こりゃ困った事じゃ」

「授戒を受けて頂く名が戒名。五重を受けて頂くのを法名と言う。それで何誓何何禪定門ということになる」

「へえ、授戒の他に五重とかも受けねばまともな戒名を貰えんとは、こりゃ何とも厄介至極という処じゃ。その正式な戒名を貰わねば仏様のお救いには与かれぬ訳じゃろか？」

真覚は慌てて手を振った。

「そんな事は無い。如来様のお救いに与る事と戒名は何にも関係無しじゃ」

「ホホウ。そうですかい」

作平の満面に悦びの色が拡がった。

「そうじゃろな。俺は二三度、村の称名寺の和尚さんの話を本堂の隅で聴いた事がある。念仏申せ念仏申せ念仏さえ心こめて申せば、必ず阿弥陀様が救うて下さる。

いや念仏の中に阿弥陀様の智慧も働きもこめられてあるのじゃから、念仏申す時は如来様と一体にならせて頂いている事じゃと。何でもそんな話じゃと覚えていて。戒名の事など一言も申されなんだがそれでよい訳じゃな。それでは戒名無しでゆこう。作平墓、これだけでよい。これを彫って下され。何なら和尚さん。あんたの墓も一緒に作るか？ 埒がよからうで」

真覚は首を横に振った。

「俺は今宿なし大じゃ。何処で野垂れ死ぬやも知れぬ。無論そうなれば墓も出来ぬが、まあそれでもよい。だが若し幸いに死に場所が決まる事になればその時に作る事にしよう」

逃げるように出て来た大江の善住寺を想い出した。今は檀家の衆が騒いでいるかも知れぬ。「勝手に入って無断でとび出す阿呆坊主奴」と激怒しておるかも知れぬ。「坊主は元来雲水」と聞き直るには余りにも身勝手な己の所業、これでは何処の寺でも勤まるまい。と言うて桃水和尚のように乞食の群に投じて仲間の世話をする事など到底出来そうにも無いし。乞食と言えば万福寺の竟空に連れられて初めて京に上った時、三条の橋の袂で危うく衣の裾を掴まれそうになった。逃げてても逃げても

真っ黒いその手はぐんぐん伸びて彼を追って来る。

「うわっ！」

と口の端から洩れた呻き声に彼はハッと我に返った。

「何じゃ和尚さん。何やらブツブツと言うてると思うたら眠ってござったのか。まあ建てとうもない墓を無理に建てなされとも言わんが……だいぶん疲れてなさるようじゃから、もう寝なされ。寝床は一つしか無いが、たった一日じゃが尼さんが寝た寝床じゃ」

「えっ！ あれが寝た？」

「いや、そんなにビックリせんでもええ。死躰じゃ。死躰を一日寝かといただけじゃ。何しろ丸の裸かじやからな。俺が穴を掘りに行つて留守に、滅多に無い事じゃが誰が覗かぬとも知れん。それで此処に寝かせて布団をこっぴり掛けておいた訳じゃ」

「裸？ 丸の裸でか？」

真覚の眼にも語気にも問い詰めるものがあつた。

「そうじゃ。丸の裸でじゃ。和尚さんは知らぬと見えるな。川の水死人は皆裸じゃ。いくらキチンと身仕舞して水に入つても、流れに揉まれる間にすっかり脱がされて了うものじゃ。裸にしたのは俺ではのうて水じゃ。水の悪戯と云うものじゃ。それにしても和尚さんあんたは果

報者じゃ。何せ生身の観音様を拝んだのじゃからな。俺が拝んだのは尼さんの死骸だけじゃハハハ……」

あとは空虚に嘔って酒臭い鼻のままだに板の間で寝込んでしまったが、真覚は絶望と悔恨と安堵に似たものの交錯する中で遂に寝つく事が出来なかった。そして乱れ懊悩する心の隅で、妙春のあの呼びかけを待ったが、有るものは奈落の底に沈んでゆくような不気味な静けさのみであった。

翌る日、三尺余りの石柱（それは石屋が使い物にならん、と捨て置いたのを作平が貰って来たものである）に天ヶ瀬観音。同じく作平が附近から転がして来た一尺足らずの山石に作平墓と刻み終ると、

「此の俣ではどうにもならん。此の衣を着せて下され」と、脱いだ茶の衣に路用を割いた一両の金を添え、作平が、

「もう一晚」

と引き留めるのを振り切るように、流れに副うた山路を南に降って行った。

作平はその一両で、堂と云うには余りに小さい祠を妙春の眠る場所に建て、真覚の脱いでいった衣を着せた妙春の像、いや観音像を安置した。じっと眺めていると、

土の中から甦った尼と対坐する想いであった。

此の噂は忽ち狭い村中に伝わり、次々に覗きに来る村人達は、彼にその経緯を尋ねる。

「此の観音様が俺の投網に掛ったのじゃ。どうしようかと迷うとる処へ通りかかった旅の坊さんが俺に一両呉れて、祠を建てて祀れということでのう。それに俺も独身者で、死んでも墓一つ建ててくれる者も無いと言うた処が、こうして俺の墓も刻んでくれたんじゃ。何せ有難い事よ」

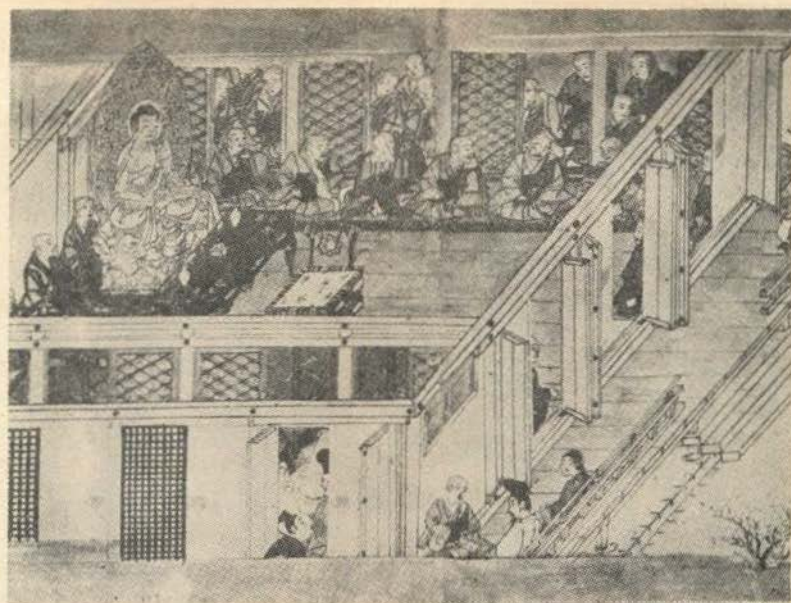
と適当に説明したが、無論尼の死骸については一言も喋らなかつた。

それから数年後、幾日も戸を閉じた俣の彼の家を開た村人は、既に冷たい骸と化している作平を見付けた。彼等は当然の事のようにその屍を観音の祠の側に葬った。

「一生独身者の作やんも、死んでからはずっと此の観音さんの側や。こんな綺麗な観音さんとな。何と幸せ者やないか」

それが彼に対する弔詞であった。

(つづく)



〈大原談義勅伝〉

浄土宗の国宝

『勅修御伝』

浄土宗に大切なものは非常に多い。正所依の『三部經典』、『選択本願念仏集』などあげればきりが無い。中でもこの『勅修御伝』もその一つであろう。四十八巻から成立しているところから『四十八巻伝』ともいわれ、法然の詳細な伝記として浄土宗徒の誰一人として知らないものはない。

功德院舜昌が後伏見上皇の勅命によりつくったもので、法然の出生から二尊院建塔にいたる間を法語や消息を入れながら詞書と絵でたくみに説明している。日本に現存している数多くの絵巻物の中でも最も大部のものとされている。全編を二三七段に分け、各段ごとに絵図を入れている。しかも絵巻物史上一級品とされないとしても絵は土佐派の人々により画かれ、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての大和絵の色々な型の作風を幅広く含んでいる。詞書については後伏見上皇、後二条天皇、伏見法皇をはじめとして当時の上流貴族の筆に

なっている。一口で「勅伝」をいえば、法然の浄土宗確立までの苦難の過程を記し、知恩院に集結する浮土宗のよさを記したものといえよう。

絵巻物は鎌倉時代に非常に隆盛をみるにいたった。それは釈迦伝から聖徳太子伝、南都真言祖師伝などの一応の技術的系譜が考えられるが、「勅伝」はあらゆる技術の集大成されたものといえよう。なぜこうした絵巻物が当時流行したかという、一文不知の尼などいかなる人々でも容易に理解するもの、視覚的言語としてのものであった。そうはいってもこの「勅伝」が法然の伝記として一日に出来たものではない。最初は短かったものがいろいろな手を入れられる。そして新しい事実や史料を入れる。また弟子達の聞いたことなどから、だんだん内容もとのえてきた。そして成立したものが「勅伝」であろう。四十八という巻数の一つをとっても、そうしたことの一端がわからう。

ところで法然の行状を絵ときにして説明することは布教においては一番よかったことであつたろうが、そればかりか「勅伝」に記された当時の社寺仏閣や庶民生活、世相などについても充分知ることがでさる。建築面では興福寺・東大寺・四天王寺・蓮華王院、靈山寺・清水寺・法勝寺・勝林院・延暦寺・清涼寺・二尊院や神社、貴族邸宅や武家宅など見逃

せないものが多い。一方民族的にみれば、公家が立烏帽子、武家は新烏帽子などが目立ち、服装は笠、冠が多い。女性の外出には桂をかくことが一般とされていたが、頭巾様のものも用いられた。また当時覆面が流行した。武士の中にも頬当頭巾をかむったものもあり、僧兵などはすべて覆面をしている。覆面をした女性も記されている。調度品などをみても寝室に火鉢が用いられている。また動物の描写も多く、中でも猿の描れている場所が多い。こうしてみると、当時の建築、文化、世相と、幅広い範囲の文化史料といえる。その描かれた絵からして、平安時代は貴族の時代であった。ところが貴族達がすること、持つものが庶民層に移ってきたということが理解できる。

平安末期の成立である年中行事絵巻六十巻を参照して「勅伝」ができたといわれる説もあるが、何といっても法然の人間のよさ、念仏のよさ、浮土宗のよさを全国に流布させたのはこの「勅伝」に他ならない。文盲の人々が、現今のマスコミ万端と異い、聴くものみるものには絵ときが一番うけたのに相異なる。布教者の力もさることながら、都を遠くはなれた人々にとってこの絵によって都の様子も知れ、服装の流行すらわかる。念仏の布教者がたずさえてあるいた絵伝などが本当は念仏の意味を一番よく伝えたのかも知れない。(田中)

道

東塔への道

高橋 良和

比叡山の東塔に法然堂というお堂がある。

東塔というのは、比叡山の中心のところで、根本中堂がその本堂で、その東側のところである。

この法然堂は、その昔法然上人の出家したところとして、今もなおその本堂が存在している。

然し昔のお堂ではないので、最近このお堂が改修されたのである。それというのも、このお堂は、比叡山延暦寺のものとして今日まできているが、その管理は西山三派によってうけつがれているので、毎年六月二十四日にこの法然堂で、西山三派が交替で、法要を修行している。今年はたしか西山深草派の当番であったように聞いている。

法然上人が美作の国を出たのは、ただ一人であつように記されているが、その出生地誕生寺の伝記では、稲岡栃之助と

いう下僕がつき添って比叡山にきたようにつたえられている。

童子入洛の後、まづ勸学得業が然を持宝房につかはす。源光、観学の状を拝覧して文殊の像をたづぬるに、ただ小児のみ上洛せるよし使者申しければ、源光はやく児童の聡明なることをしりぬ。すなはち児のむかへにつかはしければ、同十五日に登山す。

とある。

そのはじめて門を叩いたのがこの持宝房源光であつて、その出身の場所がこの法然堂といわれている。

法然堂のあるところは、根本中堂へ下りる道を、下りずにその中堂を左手に眺めて、まっすぐ延暦寺会館の前を通って急坂を下ったところにあるお堂である。

大津の坂本から本坂を登ると、あと少しで根本中堂であるというところの位置になる。

法然上人はこのところで四か年をすごして、十八歳のときに西塔黒谷の叡空のところに赴き、それから隠遁の生活に入るのであるが、少年時代の四か年をもしこの法然堂で送ったとすると、法然上人の遺跡としては、また非常に縁の深いところであるといえる。

比叡山のあちこちには、各宗派の宗祖が修行したところが残っている。

横川の華芳谷は、日蓮聖人が修行したところであるが、そこにもやはりお堂が残っているが、外の禪師の修行の地では、あまりお堂が残っていない。

榮西禪師や、道元禪師の修行した場所もはっきりしているが、遺跡だけである。親鸞聖人は西塔の聖天院とつたえられているが、そこにはもう寺は無くなっている。

法然堂がいつごろあったのか、その時代はわからないが、この東塔東谷のところに今もなお念仏の聲が聞こえるのである。

そしていつごろから西山三派によってこのお堂の管理にあっていたか、それもわからないようである。

然し年中このお堂には、参詣する人が多い。

比叡山は日本仏教の母なる山である。

この山に法然上人が勉強のために登山したのは、おそらく当時学問するのには、この山でしか出来なかったからであろうと思う。

そこで一つだけ不思議がある。

それは法然上人が登山した持宝房源光という、最初の師の住居は、西塔北谷となっていることである。

西塔北谷というのは、今の釈迦堂のあるところであるが、それが持宝房の住居であるとする、この法然堂は、東塔東谷となっていることに気づくのである。

昔から比叡山では、それぞれの拠点である東塔、西塔、横川と三つのところに分かれていて、その三つの拠点が西塔に五つ、東塔に五つ、そして横川に六つの谷があつて、三塔十六谷であるが、その三つの拠点にそれぞれその系統の寺院があつて、お互の交流はあつたが、その拠点は厳然と守られていたことである。

そうなってくると、法然堂のあるところが東塔東谷となっていることで、持宝房がいたところが西塔北谷といわれる点が一つの不思議とみてよいが、それは将来の問題に残して、この法然堂をみて欲しいと思う。

暑 中 御 伺

上宮学園長

小林 大 巖

浄土宗保護司令理事長
大正大学理事長

栗 本 俊 道

仏教大学長

藤 原 了 然

家政学園長

三 枝 樹 正 道

東山学園長

藤 原 弘 道

鎮西学園長

上 田 貞 雄

淑徳短期大学

食物栄養学科・社会福祉学科
東京都板橋区前野町五―二―七

開宗八〇〇年記念本堂再建

光 照 寺

調布市柴崎一―三十八
正 本 実 閑

柴 田 敏 夫

横浜市港北区菊名町 蓮勝寺

北 川 一 有

長 寿 院

東京都台東区鳥越二―十三―十八

函館 称名寺住職

須 藤 隆 仙

大正大学梵文学研究室

真 野 龍 海

伺 御 中 暑

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤 密雄

戸川 靈俊

京都市左京区黒谷町 西住院
大阪工業大学・東大阪短期大学

清岸 寺

原口 徳正

〒一五一
東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一

塚田 弘導

平塚市立野町六

晴雲 寺

〒三〇九一一
茨城県真壁郡協和町小栗下町

桂北山 一向寺

〇二九六五九一七二三八

近竜寺住職

松濤 弘道

栃木市万町二二一四
電話(〇二八二)二二一〇八〇二番

光明寺住職

白幡 憲佑

横浜市南区庚台久保山

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
(送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円
(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年七月二十五日 印刷
昭和四十八年八月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

伺	御	中	暑
岸 信 宏 京都市東山 知恩院	浄土宗宗務庁	浄土宗宗務支所	大本山増上寺法主 大野 法道
大本山百萬遍知恩寺 法主 林 靈 法 執事長 堀 靈 光	大本山光明寺法主 石 井 真 峯	大本山 善光寺大本願 法主 一条 智 光	法然上人御降誕之地 誕生 寺 岡山県久米郡久米南町
中 島 真 孝 中 島 真 哉 梅 窓 院 東京都港区南青山二丁目二六の三八	〒一一二 東京都文京区小石川三丁目二四の六 伝 通 院 (〇三) 八一四一三七〇一	祐 天 寺 巖 谷 勝 雄 〒一五三 東京都目黒区中目黒五―二四―五三	保 元 寺 里 見 達 人